

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ガブラith パトリック ウィリアム

Patrick W. Galbraith氏は、社会学、人類学、文化理論等のアカデミックな学問分野に通暁し、日本の現代文化を深く理解し、理論を現実分析に統合的に応用していくことのできる高い知的能力を有した若手研究者である。同氏は、すでに国際学会で発表を重ね、国際的な学術誌、英語の出版物にも成果があり、その高度な学術的能力は海外の研究者にも評価されつつある。そうした基礎に立ち、同氏は博士課程在籍中、東京・秋葉原のサブカルチャーをフィールドとした丹念なエスノグラフィック的研究を進めてきた。本論文は、同氏が2004年から2010年まで秋葉原で実施した参与観察とインタビュー調査の成果であり、同時に関連する文献や資料の渉猟、さらにそうした実証的成果と先端的文化理論を統合し、1970年代以降の日本のメディア文化の中での社会的モードとしての「オタク」の構築・編成を、現代資本主義の欲望の生産体制との関係において多面的に考察した研究である。本論文は、「オタク」や日本のサブカルチャーをめぐる言説の編成を歴史的に明らかにし、「オタク」についての分析視角を既存の文化理論の単なる応用にとどまらない仕方で提示し、エスノグラフィックなフィールドワークと理論的視角を統合している。

第1章と第2章では、「オタク」と取り巻く言説が、その端緒から国際的な広がりをもつに至るまでの過程が詳細に検証されている。1980年代には、マンガ・アニメの登場人物を性的欲望の対象にする社会的に逸脱した人物を指すことが多く、また「男性らしさ」を欠如させた男性をも意味したこの用語が、2000年代以降、「オタク・ブーム」や「アキバ・ブーム」というように、男性中心的社会体制に包摂され、支配的な文化コードの中に自然化・一般化されていく過程で、いかなる断裂、疎外が生じていくのかが問われ、同時に本論文の理論的パースペクティブが、人類学者ジョージ・マーカスの「移動人類学 mobile ethnography」等も参照しながら明らかにされていく。その上で、第3章ではより具体的に、「美少女」をめぐる言説とその周囲に生成される「オタク・ムーブメント」が、ジル・ドゥルーズの理論的概念である「逃走線 lines of flight」や「生成変化 becoming」の考え方を下敷にしながら考察されていく。第4章では、メイドカフェについての詳細な参与観察調査の成果が生かされ、これらの場において、このような「オタク」をめぐる断裂や疎外、逃走線が、どのような具体的、パフォーマンス的な姿をとって演じられているかが示される。さらにその延長線上の分析が、第5章では「美少女ゲーム」、第6章では「萌え」、第7章では「少女」について位相をずらしながら展開される。そして終章では、今日の社会における「オタク・ムーブメント」が、国家やジェンダー、年齢などのカテゴリーを曖昧にさせていきながら越境的に進んでいくことが、骨太の理論的展望のなかで論じられている。

質疑においては、同氏のフィールドワークの厚みや理論的考察力が高く評価される一方、同氏が基礎にしているドゥルーズの理論が、日本のオタク現象を分析する上でどこまで不可欠な理論

枠組であるのかという論点や、ジェンダー研究の成果の活用の仕方、「少女」をめぐるヴァーチャルな次元とリアルな次元の関係把握等について突っ込んだ議論がなされた。また、同氏が「オタク」を単一の概念ではなく、その中にパブリックとプライベート、支配的なものと逃走的なものがせめぎ合う抗争的概念として示し、具体的な分析で探究している点が高く評価されながらも、そうした分断線についての考察は、ドゥルーズの「逃走線」の概念に囚われないほうがもっと深められるのではないかとの指摘もあった。同氏は、審査委員からのこれらの鋭い質問、論評に対し、自らの立論について淀みなく説明し、その優れた知的考察力を改めて証明した。

以上、本論文は、現代日本社会のユニークな文化現象に対し、理論的、実践的に高度なアプローチを展開し、学術的価値の高い研究としてまとめられているとの認識で審査委員一同の評価が一致した。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断した。